村主幸一教授　略歴・業績

〈略　　歴〉

1972年 4 月　　大阪大学文学部入学
1976年 3 月　　大阪大学文学部英文科卒業
1976年 4 月　　大阪大学大学院文学研究科前期課程英文学専攻入学
1978年 3 月　　大阪大学大学院文学研究科前期課程英文学専攻修了
1978年 4 月　　大阪大学大学院文学研究科後期課程英文学専攻入学
1978年 9 月　　米国 Univ. of New Hampshire 英文科博士課程入学（1979年 8 月まで）
1981年 3 月　　大阪大学大学院文学研究科後期課程英文学専攻単位修得退学
1981年 4 月　　名古屋大学総合言語センター講師
1986年 2 月　　名古屋大学総合言語センター助教授
1988年 7 月　　米国 Harvard Yenching Institute 客員研究員（1989年 6 月まで）
1991年 4 月　　名古屋大学言語文化部助教授
1998年 8 月　　名古屋大学言語文化部教授
2004年 4 月　　名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授
2017年 4 月　　名古屋大学大学院人文学研究科教授

〈業　　績〉

著　書

1　『シェイクスピアと身体――危機的ローマの舞台化』人文書院　2013年

共　著

1　『エリザベス朝の復讐悲劇』英宝社　1997年
2　『世紀末のシェイクスピア』三省堂　2000年

論　文

1　「新しい共同体の出現――*King Lear* のヴィジョン」　*Osaka Literary Review* 第19号　1980年
2　“A Comedy of Affliction: A Study of Ben Jonson’s *Epicoene*”『山川鴻三教授退官記念論文集』英宝社　1981年
3　「乞食の宮廷――*King Lear* と Courtesy Books」『言語文化論集』第 III 巻 1 号　1981年
4　「溶解する宮廷――*The Tempest* と宮廷神話」*Osaka Literary Review* 第20号　1981年
5　「*The Book of the Courtier* にみられる宮廷社交について」『言語文化論集』第 VI 巻 2 号　1985年
6　「Courtesy books とエリザベス朝演劇」『言語文化論集』第 VII 巻 1 号　1985年
7　「*Romeo and Juliet* におけるイニシエーション」『言語文化論集』第 VIII 巻 2 号　1987年

8 「魔女・セクシュアリティ・言葉――*The Duchess of Malfi* 論」『言語文化論集』第 XII 巻 1 号　1990年
9 「『スペインの悲劇』における性と政治――顛覆の力としてのベル＝インペリア」『言語文化論集』第 XIV 巻 2 号　1993年
10 「封印された言葉――『タイタス・アンドロニカス』における亡霊としてのラヴィニア」『情報とコミュニケーション』（名古屋大学言語文化部）　1993年
11 「文字に巻かれた剣――『タイタス・アンドロニカス』における多義性と一義性」『英語青年』第139巻第 1 号　1993年
12 「料理と妊娠――*Titus Andronicus* の復讐」『英文学研究』第71巻第 1 号　1994年
13 「成長しない子ども――『コリオレーナス』三幕三場」『言語文化論集』第 XVI 巻 2 号　1995年
14 「『コリオレーナス』の身体論 (1)」『言語文化論集』第 XVII 巻 1 号　1995年
15 「『コリオレーナス』の身体論 (2)」『言語文化論集』第 XVII 巻 2 号　1996年
16 「『コリオレーナス』の身体論 (3)」『言語文化論集』第 XVIII 巻 1 号　1996年
17 「『コリオレーナス』の身体論 (4)」『言語文化論集』第 XVIII 巻 2 号　1997年
18 「『ジュリアス・シーザー』の身体論 (1)」『言語文化論集』第 XIX 巻 1 号　1997年
19 「『ジュリアス・シーザー』の身体論 (2)」『言語文化論集』第 XIX 巻 2 号　1998年
20 「『ジュリアス・シーザー』の身体論 (3)」『言語文化論集』第 XX 巻 1 号　1998年
21 「『ジュリアス・シーザー』の身体論 (4)」『言語文化論集』第 XX 年 2 号　1999年
22 “*Coriolanus* and the Body of Satan,” *Hot Questrists after the English Renaissance: Essays on Shakespeare and His Contemporaries* (New York: AMS, 2000)
23 「『ジュリアス・シーザー』と公開解剖学レッスン」『藤井治彦先生退官記念論文集』（英宝社）　2000年
24 「『タイタス・アンドロニカス』とフィロメラ物語」『言語文化論集』第 XXVI 巻 1 号　2004年
25 「シェイクスピアを読み直す――身体論登場とその背景」『言語文化叢書』第 4 号「古典を読み直す」　2005年
26 「レイプ表象の舞台化――『タイタス・アンドロニカス』の一幕と二幕を中心に」『言語文化論集』第 XXVI 巻 2 号　2005年
27 「研究ノートから――文化と歴史の中のメディア・テクノロジー（*Language Machines* を読む）」『メディアと文化』創刊号　2005年
28 「『ロミオとジュリエット』のジェンダー地理学、あるいは空間と死」『言語文化論集』第 XXVII 巻 1 号　2005年
29 「２つの演劇理論――Michael Goldman と Eric Bentley」『メディアと文化』第 2 号　2006年
30 「身体内部へ侵入する視線――『タイタス・アンドロニカス』の場合 (1)」『言語文化論集』第 XXVII 巻 2 号　2006年
31 「身体内部へ侵入する視線――『タイタス・アンドロニカス』の場合 (2)」『言語文化論集』第 XXVIII 巻 1 号　2006年

32 「日常性を運び込む嘘――『アントニーとクレオパトラ』論 (1)」『言語文化論集』第 XXVIII 巻 2 号　2007年
33 「日常性を運び込む嘘――『アントニーとクレオパトラ』論 (2)」『言語文化論集』第 XXIX 巻 1 号　2007年
34 「日常性を運び込む嘘――『アントニーとクレオパトラ』論 (3)」『言語文化論集』第 XXIX 巻 2 号　2008年
35 「死を運び込む――『ロミオとジュリエット』と『アントニーとクレオパトラ』における死のドラマツルギー」『言語文化論集』第 XXX 巻 1 号　2008年
36 「日常性を運び込む嘘――『アントニーとクレオパトラ』論 (4)」『言語文化論集』第 XXX 巻 2 号　2009年

村　主　幸　一　　教　授